

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K04465

研究課題名（和文）南ブルゴーニュの小規模ロマネスク教会堂の鐘塔の建築に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Romanesque bell tower of small churches in the south Burgandy

研究代表者

西田 雅嗣（Nishida, Masatsugu）

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：80198473

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：フランス南ブルゴーニュ地方に現存する小規模なロマネスクの教会堂について、長年実施してきた実測を中心とした建築調査で得た資料・データ・知見を総合して、ロマネスクの教会堂に乗る鐘塔の建築の性格について、考古学的な建物に即した意匠分析と、中世の時代の文書資料や進学的なシンボリズムからの検討で、建築的に独立した自律的性格を持つ建築部分であることを論じた。鐘塔の装飾意匠や寸法計画を明らかにし、正方形や高さ、そして寸法に現れる数の神学的シンボリズムを分析し、教会堂の一部である鐘塔が、中世に入々には半ば独立した建物のように認識されていた可能性を結論として得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世建築の認知論的解釈や、空間や形態や構造に見る中世の建築的心性理解を「鐘塔」に対して、建築考古学をベースにしながら明らかにした点は、歴史建築解釈に関する包括的ビジョンの提示となる。本研究が示した、中世当時の人々が自律する諸部分の集合として建築を認識し、彼らが自律建築と考えた重要な部分が鐘塔であるとのビジョンは、全体を統一的に一貫した造形でデザインした建築に価値を置く近代的ヴィジョンの最高に繋がる。また化財建造物の保存・修復においても、昨今問題となる「全体性（インテグリティ）」の考えの相対化を通して得られる創造的視点につながりであろう。

研究成果の概要（英文）：Having integrated materials, data, documents and discoveries obtained from our own architectural surveys, mainly on measurements, conducted over many years on small Romanesque churches existing in Burgundy, southern France, this study argues that the architectural characteristics of the bell-towers on Romanesque churches are architecturally independent and autonomous, through design analysis based on archaeological observation, and examination of documentary materials and theological symbolism from the Middle Ages. This research clarifies the architectural ornaments and dimensional plans of the bell-towers, and analyzes the theological symbolism of the squares, heights, and numbers that appear in the architectural dimensions. Thus, our study led us to conclude that the bell-towers, although a part of an architectural ensemble of a church, may have been perceived by people in the Middle Ages as quasi-independent monuments.

研究分野：西洋建築史・意匠

キーワード：ロマネスク 鐘塔 クリュニー 教会堂 中世建築 シンボリズム 建築考古学 建築論

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2006年から11年間、フランス南ブルゴーニュの中・小規模のロマネスク教会堂の現地建築調査を実施した。特に2012-16年度の5年間は、科研費基盤研究(A)の助成を得て、フランスでの「建築考古学」(Archéologie du bâti)の中心人物でリヨン大学第二のNicolas REVEYRON教授等との連携を取り、遺構に即した「建築考古学」研究として集中的に調査を行った。成果は『フランス・クリュニー地方のロマネスク教会堂建築群』(アラン・ゲローと共著、科研費研究成果公開促進費、中央公論美術出版、2019年)として出版したが、調査中より、調査対象のほとんどの小規模教会堂の内陣上部に建つ鐘塔の建築に、我々は特別な興味を感じていた。

建築の分野における研究対象としてロマネスクの「鐘塔」は、19世紀のヴィオレ＝ル＝デュクの『中世建築辞典』や20世紀初めの「考古学便覧」などが取り上げている。現在の我々の知見も未だそれらから大きく進んだものではなく、基本的には鐘塔の構造と形態、そして装飾意匠の類型学である。しかし、我々が長年にわたり実施してきた調査で蓄積してきた資料や知見は、ヨーロッパにおいて1990年代から始まり今では建築史研究の方法としてはすっかり定着した感のある「建築考古学」(Archéologie du bâti)や、やはり1960年代に、フランスを中心に歴史研究に大きな成果をもたらした「心性史」(Histoire des mentalités)の研究として鐘塔を考察することを可能にするもので、我々が行なってきた調査で漠然と抱いた興味は、「建築考古学」(Archéologie du bâti)と「心性史」(Histoire des mentalités)により具体的な建築学的テーマの輪郭を得て、我々が蓄積した資料・データ・知見を従前に活用することでロマネスク建築の鐘塔というテーマに新たな光を当て、従来とは多少なりとも異なる見方ができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者が、1999年に学位論文として纏めたシトー会建築の比例研究以来一貫して追求する「ロマネスクの心性における「建築」の意味と認識のされ方」を上位の問いとする研究の一部である。本研究の直接的な分析対象としては、2012-16年度に科研費基盤研究(A)の助成を得て実施した研究の調査対象であった南ブルゴーニュの村落に現存するロマネスクの小規模教会堂の鐘塔である。これらの小教会堂については、既往研究も少なく、我々が出版した『フランス・クリュニー地方のロマネスク教会堂建築群』(アラン・ゲローと共著、科研費研究成果公開促進費、中央公論美術出版、2019年)は信頼できる考古学的記述と正確な実測図面からなる重要な文献である。

これら教会堂の鐘塔については、鐘塔を、建築と装飾の重要な要素とするクリュニー修道院本山の建築との関係で意匠的類型学は語られることはあっても、建築の意味や建設・増改築の履歴にまで踏み込む研究はない。一方、一体ではあるが独立した自律建築として教会堂の特定部分を考察する研究は、教会堂の「前身廊」や「西正面」、あるいはゴシック大聖堂の尖塔などについてのものがあり、近年の研究動向の一つとなっている。本研究も教会堂の特定部分について、歴史、機能、空間、形態、装飾などを多面的に考量する近年の研究動向に連なる。

本研究は以下の三つの点について、我々が蓄積してきた資料・データ・知見に基づいて分析・考察することを目的とする。

一つは、ロマネスクの教会堂の「鐘塔」は建築的に自律した建築であるという考えである。ロマネスクの教会堂は、小規模な堂であっても、建築全体が一貫性を持った一つの建築と認識されていた訳ではなく、独立した幾つかのまとまった部分の集合体として認識されていた、というこれまでの調査を通じて我々が感じていた仮説を、南ブルゴーニュの鐘塔を例に検証する。

二つ目は、ロマネスクの教会堂の「鐘塔」は発願者や所有者を宗教的・政治的・社会的に表象するものであることを建築に即して明らかにすることである。鐘塔の自律性を示す要素の一つとして、鐘塔に施された装飾要素が表象するもの、そしてその表象の様相を、鐘塔が発するメッセージとして解読する。鐘塔に後補で施された装飾の意味は、改造の誘因と照合するなら、鐘塔の表象機能と様態の宗教的、政治的、社会的意味を明らかにすることになる。

三つ目は、ロマネスクの教会堂の「鐘塔」を、場所を聖別する世界軸として、建築の実態に即して説明することである。当時のキリスト教思想を通じた宗教的象徴性の問題としても検討し、11・12世紀の多くの神学者が語る教会(堂)の象徴的解釈を、実際の建築に対応させて考察する。

3. 研究の方法

我々が今までの調査で蓄積してきた資料・データ・知見、特にフィールド・ノート、実測野帳、大量の写真、そしてすでに作成した正確な実測図面を利用して「建築考古学 (Archéologie du bâti)」を実践することが本研究の最も重要な方法である。緻密な観察を要する「建築考古学 (Archéologie du bâti)」の実践のために、我々の既往の調査で蓄積していた資料や画像のデジタル・データ化が行われた。特に画像データについては、関係建築も含めて広く中世建築のデジタル・データを整備する必要から、**35mm** ポジフィルムで記録していた頃の調査で撮影した画像も含めて、研究代表者が撮影してきた多くの **35mm** ポジフィルムもデジタル・データ化した。当初は、必要に応じて、現地へ赴き補足調査の実施の可能性も考えていたが、コロナ禍、および研究代表者の健康の理由により、補足調査は実施せず、手持ちの資料・データ・画像を全面的に活用することとし、資料や画像のデジタル・データ化とその整理に注力した。

上記の考古学的方法と並行して、「心性史 (Histoire des mentalités)」研究として、中世の文書資料の調査とその読解がもう一つの方法となる。キリスト教関係としては、歴史的大著 **Edgar de Bruyne, *Etudes d'esthétique médiévale* (1946)** と **Joseph Sauer, *Symbolik des Kirchengebäudes* (1964)** を道案内に、**Sicardi Cremonensis episcopi の *Mitræ*** や **Honorii Augustodunensis の *Opera omnia*** の関係箇所を抽出し、建築・建設関係の中世文書としては、歴史的アンソロジーである **Mortet-Deschamps, *Recueil de textes au Moyen Âge* (1911/29)** に、関係中世文書資料を調査・読解して、考古学的な分析との照応を試みた。

4. 研究成果

ロマネスク美術の時代に描かれた大規模な天井壁画が、フランス、ポワトゥー地方のサン＝サヴァン＝シュール＝ガルタンブ修道院教会堂の身廊の天井を飾っている。身廊の天井画は、『旧約聖書』の最初の二つの書、「創世記」と「出エジプト記」で、「創世記」には「バベルの塔」の場面が含まれる。サン＝サヴァンの天井に描かれた「バベルの塔」は、田舎の小さなロマネスクの教会堂の上に乗っている鐘塔の体である。ロマネスク当時の普通の鐘塔建築であり、建造物としての高さが殊更に強調されたものではない。塔の下層部の四隅には円柱が付き、その上にアーチが乗る。ここに描かれている建設中の塔は、ロマネスクの教会堂の一般的な装飾を見せている。鐘塔の規模の大小を問わず、柱頭を備えた円柱の上に乗るアーチが開口部として、あるいは盲アーチとして、二連、三連に連なって、交差部、正面、後陣に聳える鐘塔の外観を飾る様子は、南ブルゴーニュの小規模教会堂に乗る鐘塔の一般的な外観である。サン＝サヴァン教会堂の身廊の天井にある「バベルの塔」に描かれた塔の姿は、ロマネスク建築の鐘塔の意匠の要約だと捉えることができる。

南ブルゴーニュ地方、特にその中のクリュニー地方は、ロマネスク時代を通じて優れた教会堂建築を多く建造した事で知られ、フランス・ロマネスク建築を代表する地方の一つである。クリュニーの周りには、クリュニー修道院との有形無形の多くの関係を持った集落が形成され、**10** 世紀末から **12** 世紀にかけて多くの教会堂が建設され、今なお多くのロマネスク教会堂建築が残る。この地方の小規模教会堂は、ロマネスク建築の心性史的興味での研究にとってはとりわけ注目に値する。施主の資金的な不自由さのために、建築形態は見かけ上の複雑さや豪華さを逃れ、極めて簡素なものとなるが、それでも各教会堂にはそれぞれの個性的建築表現が認められる。一般に、鐘塔を上に乗せた矩形の梁間が内陣を形作り、これを挟んで、東側に半ドームの架かったアプシスがあり、西側に簡素な単身廊が付くだけの単純な構成の小規模教会堂で、ほとんどの鐘塔は矩形平面の内陣の上に建つ。鐘塔立面は、飾りアーケードを持つ開口などの建築的な装飾で飾られる。多くの場合、上に鐘塔を乗せる矩形の内陣に祭壇が置かれる。この矩形の部屋とその上の塔は、場所の神聖さを際立たせて強調する。**12** 世紀前半の建設と考えられるマッシー教会堂や **12** 世紀後半建設のウジのサン＝マルタン教会堂、あるいは **12** 世紀前半のキュルティル＝ス＝ピュフィエール教会堂などは、こうした小規模教会堂のあり方を典型的に見せていると目される。

13 世紀のマンドの司教ギヨーム・デュランは、教会堂建築のシンボリズムを建築各部にわたって解いた『典礼の霊的意味』の中の「教会堂とその各部」**21** 節で、「教会堂の塔は、教団の守りを堅牢にして教会を防護する教団の説教師であり高位聖職者である」と言い、「塔の尖頭や頂点は、高みを求める高位聖職者の生命、あるいはその精神を表す」と言う。ここに、田園風景の中に半ば孤立して屹立する南ブルゴーニュの小規模教会堂の鐘塔に込められた意味が読み取れる。鐘塔が見せる矩形の上に乗る塔という構成は、そのまま「神殿」という建築のキリスト教的世界観の図式である。円が象徴する天上世界と、正方形が象徴する、その地上における似姿としての地上世界の二つを結ぶ世界軸が鐘塔なのである。鐘塔上部の、四角錐であったり八角錐であったりするピラミッド状の屋根は、地上のエルサレムを象徴する正方形から、天井のエルサレムを象徴する円へと移り変わる経過的な図形として解釈できる。**11** 世紀の神学者、ベネディクト会修道士のペトルス・ダミアヌスは「教会堂は世界の姿である」といった。この姿は、現実の世

界の形象という意味を持つと同時にこの世界の成り立ちの姿でもある。矩形のベイの上に鐘塔が乗る小規模教会堂の構成は、中世の心性においては、世界の成り立ちを最も単純な形で示すものなのである。エリアーデの言う「世界の中心」であり、「地上と天界との間の絆」にして「下界の領域まで達する」世界軸が鐘塔である。

小規模教会堂の場合、鐘塔の平面は多くの場合、正方形である。宗教史家ジャン・アニ(Jean Hani)は正方形を取り上げて、キリスト教の神殿の宇宙論的シンボリズムを説く(『キリスト教神殿のシンボリズム』1990年)。古代ローマの建築家ウィトルウィウスが紀元前1世紀末に『建築書』に記し、ゴシックの時代のヴィラルー・ド・オヌクールが『画帖』に描き、中世の末まで建築家が宗教建築で実践したように、円に内接する正方形、あるいは正方形に内接する円という操作で円と正方形を操る方法は、聖なる建築の構想の全てに見られる技である。『新約聖書』の「聖ヨハネの黙示録」に記述される天上のエルサレムが正方形であることが、神殿の建築としての原理に根拠を与える。天上のエルサレムも中心を持つ。カルドとデクマヌスによって東西南北に四区分された四角形の聖都であり、「templum」である。円と正方形を操ることで「templum」は得られる。正方形は円と共に、キリスト教シンボリズムにおける本源的なシンボルである。円は神、天球、天上世界を象徴する。天上のエルサレムは円で象徴される。正方形は世界である。天に対する地として地上世界を象徴する。地上の新しいエルサレムは正方形である。ジャン・アニをはじめ多くの識者は、キリスト教の神殿の原型は「黙示録」に記される「天上のエルサレム」だと言う。『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」21章で天使は「聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から降ってくるのを見た」(新共同訳)と言い「この都は四角い形で、長さと同幅であった」(新共同訳)と言う。天上のエルサレムは円であり、それが地上に降りたのが地上の新しいエルサレムで、それは正方形である。中心、世界軸、天球、円、四角形、神殿、聖都といった聖性の宇宙論的シンボリズムが、鐘塔の形にはあり、正方形平面の鐘塔は天と地を結びつけ、教会堂という建築の意味を明言する。

教会堂の上に乗る鐘塔は、内部に鐘を釣るための建物であり、鐘の音を遠くにまで届かせるために高く築かれる。高さの建築として築かれる鐘塔は同時に、遠くから見られるシンボルとしての役割も担う。鐘塔内部は鐘を釣るだけのもので、通常は、最上部に鐘を釣るための木造台座と、木造であることが多い、狭くて急な階段以外は、何も無い空洞となる。壁の石の表面には、漆喰の上塗りの仕上げはされず、粗い石の表面を露出する。組積の様子から、鐘塔の建設の経緯や建設年代、外からは隠れてしまっていて見えないことの多い埋め込みアーチなどの構造などについての情報が得られる。

鐘塔は、外から見られるシンボルでもあるので外部には装飾が施される。またその高さ自体もシンボルとしての役割を持つ。クリュニー地方の鐘塔の例では、上部が半円アーチの形をした縦長開口部以外は何の飾りも持たないキュルティル=ス=ビュフィエール教会堂のような無装飾の例もあるが、多くの場合、鐘塔の外部は外壁を飾る装飾によって三層、あるいは二層に区分される。下から、盲アーチ装飾やロンバルド帯で装飾される、あるいは全く装飾要素のないただの壁面を露出する最下層、上部が半円アーチになった縦長の窓が一つ、あるいは二つ開く中間層、そして、柱頭を持つ小円柱に支えられる二連あるいは三連アーチ開口部で最も入念に装飾される最上部、という装飾の構成を見せる。サン=サヴァンの「バベルの塔」の天井画は、こうした装飾の要約だったのである。この地方の鐘塔外部の装飾の最も手の込んだものは、本山であるクリュニーの巨大教会堂のものである。クリュニー修道院最盛期の1130年頃に建てられたクリュニー第III教会堂の、現存する部分である大交差廊南側の八角形鐘塔「聖水の塔」がクリュニー地方にとっての最も豪華な装飾であった。

鐘塔の乗る矩形の柱間は概ね常に正確な長方形であり、やはり比較的正確な半円形を見せることの多いアプシスとともに、入念に計画・施行された部分である。入念に施行され手厚く守られてきた鐘塔であるがために、そしてその建築的な重要性のゆえに、鐘塔には建設された後も、様々な機会に、より立派なものにしようとして、後世の手が入っていることが多い。中世の間に、あるいは18世紀を通じて、また、とりわけ19世紀末から20世紀の初めにかけて、クリュニー地方の鐘塔のほとんどには何らかの改変が施された。多くの場合、それは高上げと、より尖った形の四角錐屋根の設置であった。

例えば、ウジの教会堂は、クリュニー第III教会堂の鐘塔をモデルとしたこの地方の典型的な鐘塔を持ち、鐘塔に乗る美しいすりとしたピラミッド状の屋根を鐘塔に乗せる。この石造の四角錐屋根は、簡素ながらこの地方の最も美しい形として知られる。この四角錐屋根は、鐘塔内部の四角錐屋根の基部に部分的に鉄筋コンクリート造の基部露出している。20世紀初めの工事である。

また、ラ・ヴィヌーズ教会堂の鐘塔の最上層の外観には、それより下の部分と僅かに異なる部分が認められる。塔の四隅の壁の厚くなった部分の幅が、最上層ではそれより下よりも狭く、三連アーチによる装飾部分の幅が下の層の装飾部分よりも僅かに広い。最上層の装飾は、柱頭が乗った小円柱が支える三連アーチである。この意匠は、この教会を管轄する司教がいるマコンのサン=ヴァンサン大聖堂の玄関口の二連アーチ意匠をモデルとしたものである。司教とクリュニー修道院が争っていた1110-1120年に、司教がその力を誇示するべく自分の大聖堂の意匠を模して作って高さを高上げた部分が、この鐘塔の最上層である。

ブラノ教会堂とドンズィール=ペルテュイ教会堂は、共に10世紀末の創建と考えられる教区教会堂で、互いに8キロメートルほど離れた村落にあり、それぞれ別の教区に属する。中世の時

代、二つの村落は競争関係にあった。その様子は、鐘塔のデザインや高さに読み取ることができる。ドンズィ＝ル＝ペルテュイの鐘塔最上層は、四隅の付柱上端よりも高く、飾り軒持ち送りや最上層の二つの開口部の形状から、この鐘塔は12世紀の終わり頃に1メートルほど嵩上げされたことが読み取れる。プラノの鐘塔の中間層は、二連の開口の間に小円柱が建ち、両脇に半円アーチの二連の盲アーケード装飾があり、鐘塔全体が簡素な趣の中にあって手の込んだ装飾を見せる。ドンズィ＝ル＝ペルテュイの鐘塔同様、10世紀末から11世紀の建築である。ゴシック風のアーチ装飾を持つ最上層は16世紀前半の嵩上げの時に作られた部分である。

以上の所見の他にも、我々が調査したものの中では、クリュニー地方より若干北東の旧オートアン司教区のオートゥノワ地方の二つの教会堂、ドゥテとシャルボナは、外観上に現れる立体としての建築の形態として鐘塔の独立性を見せる。鐘塔の平面が、その下の矩形の内陣に一致し、内陣の矩形がそのまま上に伸びて鐘塔のヴォリュームを形作る。身廊は両教会堂とも単身廊で、木造の小屋組となっていて、小円柱で飾られて手の込んだ装飾を見せるアブシスや、寸法の狂いも少なく正確に計画・施工されている鐘塔と異なり、建築として随分と粗末である。ドゥテでは、身廊の軸は内陣のそれからかなり北の方へと曲がっていて、縄張りの精度においても、アブシス・内陣・鐘塔とは扱いが異なる様子を見せている。

鐘塔の建築に認められるこうした建築の有り様は、プロポーションや寸法にも読み取ることが可能であると思える。実測から分かる鐘塔の寸法計画がそれを暗示する。南ブルゴーニュ地方の教会堂の建設に用いられた物差しは、1尺が29,5cm程度の長さのローマ尺か、あるいは1尺が30～35cm程度の長さの地方古慣用尺のどれかであると考えられる。ローマ尺、あるいは地方古慣用尺のもとで、この地方の鐘塔の平面の一边の外法寸法には、13、15という尺数が与えられており、内法には10、13というような数が現れる。矩形内陣は、平面が、正方形のものと同幅広長方形のものがあり、一边の長さの尺数には、8、10、12、15、16、20などの数が選好的に用いられている。これらの数は12世紀に著されたラングルのティボーの数象徴論などには、聖なる象徴的意味を持つ霊的な数としてあげられている。

調査を行った教会堂の中で唯一、マズィユは、鐘塔が矩形内陣の南側に隣接して建っている教会堂であるが、大変に美しい鐘塔を有し、この小規模ロマネスク建築では有名である。矩形の内陣部上部の小屋組やヴォールト上面の組積の観察、鐘塔の組積の観察から、現在見る鐘塔は、11世紀の初めに一旦完成した教会堂の内陣部を、12世紀になって改造した際に建造されたと考えられる。ピラミッド状の特徴的な屋根を乗せ、四隅にロンバルド帯状の控え壁を持ち、軒下には軒蛇腹が通り、その下端には連続する小アーケード飾りが付く。最上層の二連アーケードは、中央の柱頭を持つ小円柱で支えられ、窓台となるコーニスで区切られたその下の層は、二輪になった半円形アーチ開口が二つで飾られる。特に手の込んだものではないが、この地方の典型的な鐘塔意匠である。細部の観察からは、11世紀に一旦完成した教会堂は、矩形内陣の直上に鐘塔を乗せていた可能性はある。矩形内陣の南に突出する形で、袖廊の如くにとりつく鐘塔基部は長方形平面で、この地方の古慣用尺で内法が13尺×10尺である。鐘塔上部の内法は8.5尺四方となる。クリュニー地方では、中世を通じて最も一般的な屋根葺き材料は、教区教会堂のような小規模なものでも、瓦であった。この地方に現在残るロマネスク教会堂のほとんどは、瓦ではなくてラーヴと呼ばれるスレート状の石で葺かれていて、マズィユの屋根もその例に漏れない。1930年代に実施された修復でラーヴに取り替えられたもので、20世紀の初めになってもこの鐘塔は、ローカルなシンボルとしての役割を失っておらず、時代に合わせて念入りに手入れされていた。マズィユの鐘塔は、その美しい整った外観と、鐘塔の典型的な意匠そしてトンネル・ヴォールトがかかった身廊とで、建築的に質の高い小規模教会の代表例と目されるウジのサン＝マルタン教会堂とともに、本研究の結論として取り上げるにふさわしい、南ブルゴーニュ地方のロマネスクの鐘塔のあり方を雄弁に物語っている代表的事例であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Samantha Houriez, Hugo Freby, Arnaud Timbert, Emanuele Romeo, Caroline Bruzelius, Vivane Delpech, Nishida Masatsugu et al.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 WriteUp	5. 総ページ数 224
3. 書名 Dialogues sur Notre-Dame	

1. 著者名 西田 雅嗣、小林 正子、本田 昌昭、南 智子、原 愛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸出版社	5. 総ページ数 127
3. 書名 カラー版 図説 西洋建築の歴史	

1. 著者名 Ito Teiji / Philippe BONNIN, NISHIDA Masatsugu, Marie-Elizabeth Fauroux	4. 発行年 2021年
2. 出版社 CNRS Editions	5. 総ページ数 313
3. 書名 La beaute du seuil - Esthetique japonaise de la limite	

1. 著者名 西田 雅嗣	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 388
3. 書名 歴史の建築意匠 西洋と日本、意味と形	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------